立教英国学院通信

第二七〇号　二〇一五年七月一〇日
発行者　立教英国学院
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK　RH12 3BE
http://www.rikkyo.co.uk

入学始業礼拝

四月一二日、立教英国学院では入学始業礼拝が執り行われ、二〇一五年度が始まりました。

青空が広がる中、四一名の新入生を迎えることができました。さらに今年は桜の開花が遅く、当日はちょうど満開。春らしい始まりの一日となりました。

当日到着した新入生を迎えるのは、高等部三年生の生徒たち。この日から最上級生の証である赤ネクタイをつけて、受付や校内案内を行いました。

「赤ネクタイは責任の重さの証」。毎年、校長が入学始業礼拝で高三生に送る言葉です。

笑顔で新入生を迎え、案内を行う姿は頼もしく、まずは一日目、きちんと責任を全うしてくれました。

新入生と保護者を交えて昼食をとった後、午後三時より入学始業礼拝がチャペルで行われました。新入生はこれからどんな生活が始まるのか、在校生はどんな一年が始まるのか、ドキドキしながらの出席となったことでしょう。

礼拝の中では新入生一人一人に校長先生から校章のワッペンが手渡されました。名前を呼ばれるとそれぞれ緊張した面持ちで前へ出てワッペンを受け取りました。学期が始まってしばらくは慌ただしい日々が続きますが、新入生には一日も早く寮生活に慣れて立教生活を楽しんでほしいものです。

立教英国学院で生活するみんなにとって、この一年が実り多きものでありますように。

赤ネクタイと四月の雪

高三－一　田中　美帆

桜も満開になり希望に満ちた春。とてもよく聞くフレーズである。私たちは今年から高校三年生となり、その象徴である高三の赤ネクタイをしっかりと着用している。新しい学年に新しい後輩。沢山の「新しい」を導いていかなければならないのが私たち高三生の役目である様に思う。

その役目の一つとして、新入生の案内というものがあった。文字通り新入生に校内の案内をする。多少の緊張もあったが「ついに自分たちがこの仕事をするのか。」という責任感も同時に抱いた。

話は少し変わり、日本では四月の上旬になんと雪が降った。東京の一部では、五センチの積雪を記録した地域もあったらしい。春に雪が降るなど驚きである。しかし、桜の上に積もった雪は本当に美しく時間を忘れてしまいそうになる程であった。ただでさえ弱い桜に雪などとんだ仕打ちである。そのせいで散った桜の多さこと。美しく胸打つものは、そう簡単に長くは続かないことを痛感した。

話を戻そう。私たち高三には受験という重荷がもれなく付いてくる。最高学年という責任も伴ってくるだろう。けれど、それとともに歩んで得られるものが本当に手にしたいと願う将来である様に思う。

雪に積もられた桜でも、雪が溶けた水を糧にしたのか、そのあとも強く咲いているものもあった。その桜は私たちを体現しているように見えた。今、桜のように咲いている私たちは、重荷でさえも糧とし、新芽という将来に向かい胸を張れるようしっかりとしなければいけない、そう心に強く思わせてくれた四月の上旬であった。

－目次－

	ページ
入学始業礼拝	1
球技大会	2～3
JAPANESE EVENING	4
London Outing	5
Our Happy Half Term	6
立教の生活特集１	7
ホーシャム市議会を見学	8
フィールドワーク	9
立教の生活特集２、３	１０
新・女子寮完成	１１
第6回　チャプレンより	１２

最後の球技大会　高三という自覚

高三―一　岡田　千加子

今回の球技大会、私は三年連続でバレーボールだった。毎回勝ったり負けたりと接戦で、その度笑顔だったり、涙したり。毎年それぞれの思い出がたくさんある。中でも今回の球技大会は、自分は高三なのだと自覚することができた良い機会となった。球技大会前日の夜、私は二年前の球技大会を思い出していた。あの時はとにかくがむしゃらにボールに飛び込んでいった事とか、仲間と声を掛け合って励まし合っていた事など。あの頃はとにかく卒業してしまう先輩たちのために絶対負けられない、絶対勝ってやる、そんな気持ちでいっぱいだった。けれども今の私の気持ちは違った。後輩たちに楽しんでもらいたい、良い思い出を残してあげたい、後輩たちのために負けられない、そんな素直な気持ちだった。

球技大会本番、前半は一対一の接戦で、延長戦に入った。点を取ったと思ったら取られたりとそんな試合を繰り返し、十四対十三と相手のマッチポイントにさしかかった時、サーブの順番が新入生にまわった。彼女の中できっと焦りや恐怖があったはずだ。結果サーブミスをしてしまい、この試合は負けとなってしまった。彼女は何度も何度も謝り、自分を責め泣いていた。私も悔しくて泣きたかった。しかし彼女を見た時、泣いてはいけない、私がしっかりして慰めないといけないと思った。

人は知らない間に成長すると聞いた事があるが、こういう事を言うのではないかと思う。先輩のために自分のためにと思っていた事が、後輩のためにと変わる。自分は高三なのだという実感がやっと湧いてきた。そんな球技大会だった。わたしはもっと高三という重みを背負っていけるだろうか。残りの二学期間で胸を張ってそう言えるようになりたい。

球技大会

高二―二　角田　真一朗

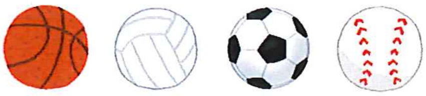
今まで、学校の運動会や体育祭といったスポーツ関連の行事に参加したことは何度もあったが、立教英国学院の球技大会ほど積極的になったことはなかった。

運動部に所属したことがなく、特にスポーツが好きでない自分にとって、放課後に球技の練習を何時間もすることは、練習シーズンが始まった頃、とてもきつく感じた。

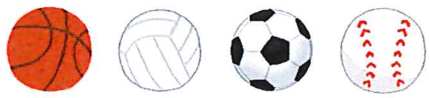
しかし、学期がはじまって一週間が経とうとした頃、一日の流れが急に加速していくように感じることにあわせて、球技大会の練習が自分の一日のサイクルの中の一つとなって、それが当たり前のことになっていった。気づけば、練習を楽しんでいたくらいだ。

自分が参加する球技大会はバレーボールだった。過去に経験がある球技は野球しかなかった(といっても小学校の頃に三年程度だが)ので、第一希望はソフトボールだった。しかし、抽選か何かで落ちたのか、第二希望のバレーボールをやることになった。嫌だった訳ではないのだが、経験の無いスポーツを二週間程で試合ができるまでに上達させられるのか、という不安を抱えてのスタートだった。最初は、アンダーボールでボールを返すときに、腕がとても痛かった。ところが数日もすると、そんな不安や痛みはどうでもよくなっていた。先輩やバレーボール部員とやっていくうちに、バレーボールという球技が自分の中に浸透していた。

当日、男子バレーボールでは、各々が好きな背番号をつけたTシャツを着て本番に臨んだ。色んな人にTシャツにメッセージを書いてもらった。敵味方関係なく、だ。立教英国学院の球技大会は、試合の勝敗はもちろん大事だが、それよりも皆で放課後の時間を費やした成果を敵味方なく共有し、互いを理解するためのものだと、ふと自習時間中に振り返りながら考えている自分がいる。



球技大会



うちらのソフト

高二―二　花沢　佳奈

まばゆい太陽の中から、まるで皆既日食のように、かたや隕石のように、それはスローモーションで降ってきた。

土曜日は雨が降るらしい。礼拝で校長先生の口から出た言葉に、私は何も感じなかった。普通球技大会当日に雨が降るとなると、気落ちするところだろう。特に種目はソフトボールだったので、そう思っても何ら不思議はない。それにも関わらず無関心だった理由は、ただ「出たくない」という気持ちからだった。それというのも、私のチームは練習試合で一度も勝ったことがなかったからだ。凡ミスが多く、飛距離はなく、ミスをすればするほど気力が削がれていく。そんな悪循環の中で、私はただやるせなさを感じていた。

金曜日、前日練習の日、私はこの日を良く覚えている。一人ひとりの弱点と、バッティングの強化。その日、初めてしっかりと、お互いに改善点を言い合うことができたのだ。普段接点がない者同士は、お互いに思っていても口には出せない。だから、端から見れば大したことでなくとも、私達にとっては、とても凄い進歩だったのだと思う。

球技大会当日は曇天模様からのスタートだった。しかし、前日に生まれた士気のおかげで、天候など取るに足らないものだった。もう無関心などではなく、勝ちたいという思いで、外野にどっしりと構えた。声を張り上げながらも、私はどこか冷静だったのだと思う。ダブルプレー。それは人生で初めての出来事だった。外野で構えていると、薄汚れたはずのものが、太陽の光を反射して、私の目をくらませながら、流れ星の様に、しかしゆっくりと、手の中に降ってきた。フライ、ワンアウトだ。まだ二塁ランナーは戻っていない。私の頭はこれまでになく冷静に、貪欲に勝利を求めた。

試合が終わった瞬間、半信半疑だった私たちは、勝利を確かめ合うように円陣を組んで叫びまくった。全員で連携を取って、気迫負けしないように常に声を張って士気を高め合い、手に入れた勝利。ただただ嬉しかった。

今回の球技大会は、今までになく、大切な経験を与えてくれた。まず一つに、高二という立場の難しさだ。先輩だけに任せるわけにはいかず、下級生へのアドバイスに気を遣ったりと、大変だった。しかし今回、本気でぶつかれば、相手も本気で答えてくれることを学んだ。遠慮や気遣いばかりするのではなく、本気を見せつければいいのだ。二つ目に、私たちは叱咤激励を繰り返し、お互いの役割や士気を再確認していく中で成長するということだ。正直私たちが勝つことができた大きな要因は、チームワークと声によるものだと思う。何よりも自分を、仲間を鼓舞することで一体感が高まったのだと思う。これらは綺麗事と思われがちだが、球技大会は、これらの言葉が本当のものであることを、本気で取り組んだ者にだけ教えてくれるのだ。

それは実は、私たちが自ら掴みに行ったものなのかもしれない。

入学からたった二週間で行われる球技大会の意味

高三―二　藤原　百花

私は高二でこの学校に入ったので、今回が二回目の球技大会だった。去年の球技大会と、今回とでは、私にとって全く違うものだった。

去年は初心者で、先輩についていくだけだった。今年はキャプテンを支えつつ、下の学年をひっぱっていかなくてはいけなかった。

スポーツが大好きで、負けず嫌いな私にとって、球技大会は、たかが球技大会、されど球技大会。一週間前から、球技大会のことを考えるだけで胸が苦しかった。まるで恋をしたみたいだった。就寝後なかなか寝られなかった。

私のチームは、女子バスケットボール部キャプテンと、バスケットボール部員一人、そして新入生二人で編成されていた。正直、不安だった。私たちだけで、チームをつくれるのか。

そんな時、球技大会の意味を考えた。どうして小五から高三までが一緒にやるのか、どうして入学式からたったの二週間でやるのか。それは、考えても答えがなかなか出せなかったが、練習がはじまってすぐに分かった。そういえば、私も去年この球技大会で、立教に慣れてすごく楽しかったなと思い出した。

そこで私とキャプテンは全員で勝とうと決めた。ボール運びが得意なキャプテン、背が高い私、コツをよく知っているバスケットボール部員、走るのが速い新入生、運動神経が良い中学一年生。この五人の良いところを生かして、勝負をしようと決めた。今では、この五人が同じチームで本当に良かったと思う。

また、私は立教生の良さを感じた。前夜祭では一人ひとりにTシャツを配るときに、みんなで盛り上がった。当日も、たまたま同じ色のチームになっただけなのに、みんな大きい声で応援してくれた。名前を呼ばれた時は本当に嬉しくて、疲れてもう走れないと思っていたのに、急に力が沸いた。逆に自分も他の競技の人を必死で応援した。これは、去年も今年も自然とやっていて、立教の良い伝統だと思う。

この球技大会で、バスケットボールを頑張ってよかったなと思ったし、立教にいられて本当に幸せだなと感じることができた。

今年も大盛況のJapanese Evening

五月八日(金)、立教では毎年恒例になっているJapanese Eveningが行われました。七時半の開場前には、すでに多くのお客様が入口で待っている状態で、過去最多となる約一五〇名の方々が会場に足を運んでくださいました。

地域のみなさんに日本の文化、伝統を紹介して、日英の文化交流に貢献したいという思いから始まったJapanese Eveningも今年で一一年目。毎年この日を楽しみに来場してくださる方もいるそうです。

今年は地域交流委員の生徒たちによるプレゼンテーションから始まり、あやとり、折り紙、書道、昔遊び、そろばん、箸、茶道、ジブリ作品紹介、独楽、剣玉、射的、剣道と多岐にわたる展示、企画が行われました。

英語でコミュニケーションがとれるか不安だと吐露していた生徒たちでしたが、いざお客様を前にすると、楽しそうに英語で会話している姿が多く見られました。来場した英国人たちも非常に楽しんでくださったようで、生徒も一生懸命準備した甲斐があったのではないでしょうか。

英国で触れる本場の英国文化が私たちにとって新鮮なように、本日来場してくださった方々も生の日本文化を肌で感じて、記憶に残る経験になったはずです。「おもてなし」の心をもって、日本の文化を英語で海外に発信できたことを誇りに思ってほしいと思います。

近年日本では英語のspeaking skillsが重要視されていますが、言語はあくまでコミュニケーションツールです。肝心なことは英語で何を話せるか、伝えられるかではないでしょうか。今回の行事を通して、生徒達は自国の文化を英語で伝える、真の異文化コミュニケーションをとることができました。この経験はきっと今後にも生きてくるはずです。

ジャパニーズイブニング

小五　矢野　正徒

今日は、ジャパニーズイブニングでした。ぼくは射的の企画に参加しました。なぜなら射的はいっぱいあてたらしょう品がもらえると思ったからです。でもわりばしで作ったもので、しかも射的をするのは英国人のお客様なので、ぼくはしょう品がもらえませんでした。残念でした。でも楽しそうです。だから準備をがんばりました。

七時五〇分になって、たくさん英国の人がきました。すごくきんちょうしました。でもうまく説明できたのでうれしかったです。お客様はいっぱいミスをしていたけれど、一回やり方を言えばかんぺきにできていたのでちょっと感動しました。でもたしかに「すごくむずかしい」と言っていたので、それは仕方のないことだと思いました。お客様が少なくなってきたとき、よくがんばったと思いました。やっと九時半になったので、かたづけやさよならのあいさつをして寝ました。

今日はすごく楽しかったです。

JAPANESE EVENING

充実した春休み

M2　柳田麗安

この春休み、私はお母さんの実家の中国、大連に行った。大連は海に近く、新鮮なカニやヤドカリなどを生きたまま市場から買ってきて家で食べたりする。その味は最高だ。私は毎回大連に行くのを楽しみにしている。

しかし、今回はそれ以上に楽しみなことがある。それは、私のお母さんの弟の２才の子ども、つまりいとこに会うことである。おじさんとおばさんは共働きで仕事をしているあいだ、私たちがとまっているおじいちゃんの家でお世話をすることになっている。私と妹も世話をするのだが、相手はもちろん中国語を話す。しかも２才だから言っていることがいまいちわからない。お父さんをさがして泣くし、おもらしもするし…。とっても大変だった。私は妹と四才はなれていて妹の世話をした記憶がないが、今回やっと赤ちゃんの世話をする大変さがわかった。とともに、お母さんは２人、おばあちゃんは、お母さんとその弟と私と妹といとこで５人も同じことやっているなんてすごいと思った。私なら途中で投げ出してしまうかもしれない。日曜日から土曜日までたった１週間くらいだったのに、気まぐれな２才児にふりまわされてどっと疲れた気がした。

次の週末にはもう帰ってしまうので、その前に外で料理を食べた。中華料理といっても日本で食べるのと少し違う。イギリスで日本食を食べるのと同じ感じだ。

中国はお茶もお金がかかる。各テーブルにポットが置いてあり、お茶だと思って入れたらお湯だったことがある。「お茶いれてあげる。」とみんなの前で言ったあと、注いでみるとお湯でみんなに笑われたこともあった。あの時はとても恥ずかしかった。

このように日本と違うところがたくさんある中で過ごした春休みはとても充実したものだった。

高等部一年生はＵＣＬロンドン大学と大英博物館を訪ねました。

前日は一日中雨でしたが、この日は快晴。風がすこし肌寒くありましたが、天候に恵まれたと言えます。

立教に入学して初めてのロンドン外出とあり、生徒たちはハイテンション。寮では、朝起きてすぐに準備を済ませてしまったため、朝食をしらせる鐘を手持ちぶさたに待っている生徒もいたようです。

ロンドン中心まで二時間のバス移動のあと、最初に訪れたのはＵＣＬ。立教英国学院が進学のための提携を結んだ大学です。待っていてくださったのは日本人の大沼教授。

「ＵＣＬって聞いたこと無いよね。実は東大よりもすごい大学なんだよ」

「過去には伊藤博文や小泉純一郎が留学していて、最先端の研究ができるんだよ」

ＵＣＬの紹介を、生徒たちにわかりやすく丁寧にしてくださいました。同じ日本人として、イギリスで活躍する大沼教授の話を聞いて、生徒達も興味津々。これから先、日本の大学だけにとらわれずに、広い視野をもって進路を考えてくれそうだ、そう思える生徒達の姿勢でした。

昼食後は大英博物館。世界有数の博物館で、無料で入館できます。その一番の目玉である「ロゼッタストーン」。世界史の先生の解説を聞きながらメモをとった後は、自由に見学。展示物の多さに圧倒され、最後は疲れた様子でしたが、人類の過去を知りたい、謎を解き明かしたいという人間の「知的探求心」が大英博物館をここまで発展させてきたことを肌で感じ、これからの勉強によい刺激を受けてくれたと思います。

その後は班行動、夕食。この時ばかりは好きなものを食べられるとあって、中学から在籍していた生徒を中心に念入りに計画を立ててきたようです。中華、和食、ファストフードなど、自由に満喫していました。

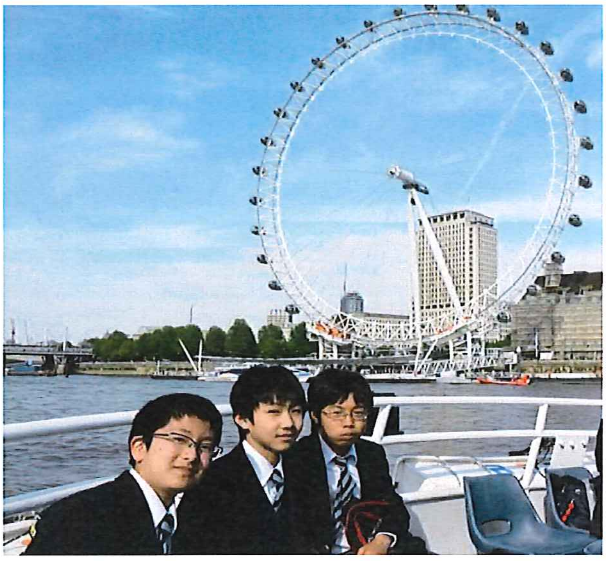
（熱心に先生の解説を聞く生徒）

【Ｐ５～Ｍ３】
王立天文台
ナショナルギャラリー

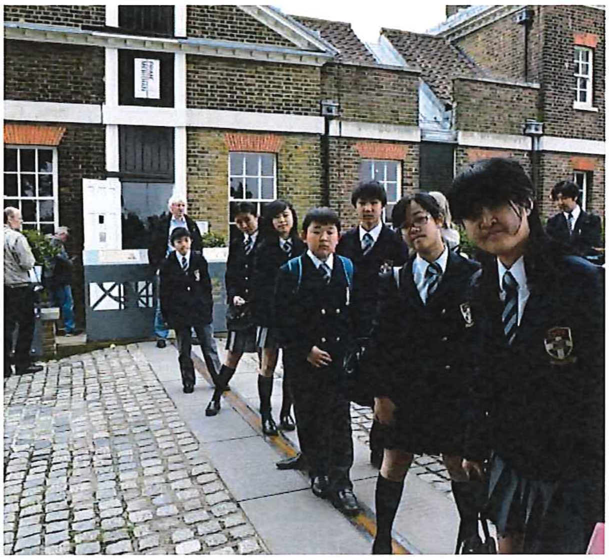
【Ｈ１】
ＵＣＬ、大英博物館

【Ｈ２】
ナショナルギャラリー

London Outing



River Bus でロンドンへ。その際、テムズ川の両岸にタワーブリッジ、ロンドンブリッジ、ロンドン・アイ、ビッグ・ベンなどが次々に現れ、ロンドンを代表する建造物を見学しました。



王立天文台は、グリニッジ標準時と東経０度00分00秒の本初子午線で有名な場所です、まさに生徒がまたいでいるオレンジの線が、本初子午線です。

初めてのホームステイ

小五　石川　容介

五月二三日土曜日からハーフタームが始まりました。ぼくと同じ五年生の矢野君は家に帰りましたが、ぼくは英国人の家族のところでホームステイをします。中学一年生の田中先輩といっしょにすることになりました。

ホームステイのホストファミリーは、フィンリィという八才の男の子と、フィンリィのお父さん、お母さんの三人家族でした。

ぼくがホームステイ中に一番楽しかったのは、牧場に連れて行ってもらったことです。行った牧場には、ポニー、やぎ、ブタ、アルパカ、うさぎ、にわとり、そして大きな馬もいました。入場料は九ポンド五〇ペンスでした。

最初にうさぎを見に行きました。えさをあげたら食べてくれたのでうれしかったです。次にやぎがいたので、またえさをあげたら、ものすごいスピードで食べたので、びっくりしました。楽しくなって、今度はにわとりにもえさをあげようと思いました。でも、にげられてしまったので、少し悲しかったです。そのあと、坂を登っていくと、右側に大きい馬がいました。その馬には、手渡しでえさをあげることができました。とてもうれしかったです。そのあと、やぎにもポニーにもえさをあげました。

牧場では、他にも、黄金ほりやジャンピングピローで遊びました。

行く前は、見学したり、歩いたりするだけかと思っていたけど他にもたくさんできることがあって、とても楽しい一日でした。

ハーフタームのホームステイの間には、たくさん出かけたり、庭でいっしょに遊んだり、英国人の家族といっしょにすごすことができて、ぼくにとって初めての経験になりました。次のホームステイも楽しみたいです。

成長

中三　齋藤　逸成

僕のホームステイは今回で七回目となった。

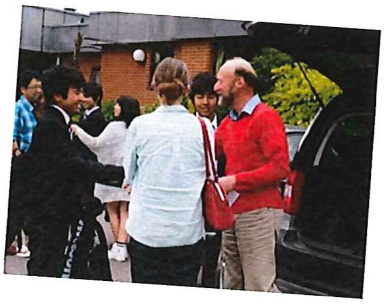
最初のホームステイでは全く英語がわからず、appleが言えたかなというぐらいだった。ホームステイ先の人が、英和、和英辞典のアプリを見つけてきてくれて、それを使って話すという日々だった。二回目、三回目ではジェスチャーだけでもいいから、とりあえず自力で話すことにした。

四回目、中二の一学期のホームステイでは、ちょっとした文法なら授業で習い、少しはイギリス人とコミュニケーションをとれると思ってホームステイに参加した。イギリス人に自分から話しに行くことはできた。だが、質問を返されたり、聞いたこともないような単語を言われてしまうと黙り込んでしまう状況だった。黙り込むたびに苦しんでいたのを今でも覚えている。ホームステイが終わった後に振り返ると、それは仕方がないことじゃないかと思った。自分はこれだけ言って終わろうと思っていたのに、急にまだ慣れていない言語で話しかけられたら、焦ってしまい、ろくに話なんか聞けないと思うからだ。だから、これからはそういった状況に慣れるためにも積極的に話そうと、この一年間やってきた。

そして今回、中三になった僕にとって初のホームステイ。特に緊張はしていなかった。とりあえず何でもいいから話そうと思っていた。そのため、僕は朝起きたらまず挨拶をしにリビングに行った。そこで、もしホストファミリーとの予定があればそれを確認し、自分たちの予定であれば、何時にどこに行き、何時に帰ってくるかなどを話した。食事中には、立教の話や日本の話、一日の流れなどを話した。時には難しい単語を言われ黙り込んでしまうことがあった。しかし、その数は確実に減ったと思う。そして、ホームステイ後半になっていくにつれて、朝の会話や食事の時に「通じた」と思う回数が増えていった。特に僕が印象的だったのは、「サッカーを五年間やっています」というのが通じたときだった。少し前に英語の授業で習った現在完了を実際に使えたのだ。それが、僕にとって一番嬉しかったときだ。

少しずつではあるが、この三年間を通して自分の英語を話す力が成長しているとわかるホームステイだった。たしかにまだ、少ししか英語は話せないが、恐れずにこれからもがんばっていきたい。

Our Happy Half Term



貴重な体験

小六　藤原　吏花

ハーフタームに、フランスの家のとなりの川を船が通りました。

フランスでは、大きな船を買う人がいます。そこに、住所をもって、船の中に住む人もいます。そういう船が、家のとなりの川に、たくさん止まっています。その船が動いていました。

その川を少し進むと、川の高さが変わっているところが三か所ありました。その三か所には、一つずつ、信号とへいがありました。

その船に、お父さんとお母さんとついていってみました。

すると、信号の所まで進んだ船が少し待っていると、信号が青になり、へいが開いたので船が進んでいきました。へいが閉まると、もう一つ先のへいが開き、船がいるところの水を増して、同じ高さになると、船はまた進んでいきました。

フランスにいるから見られた、日本では見られない光景だったので、うれしかったです。

最初は、水の高さが違うのにどうやって通るのか不思議だったので、ようやく通り方が分かりました。

日本にもどっても、ずっとこのことは覚えていると思います。

※写真はイメージ図です

立教の生活　特集1

Epsom Cup
男女共に優勝

毎年Epsom College主催で行われる　Epsom Cup でバレーボール部が優勝しました。この大会には男子６チーム、女子４チームが出場しました。男子は３年ぶり、女子は連続優勝を果たしました。

ブルーベル散策

ブルーベル散策は、毎年全校生徒で行う行事です。４月～５月頃に見頃を迎え、学校の裏にある森に美しく咲きます。

ウィンブルドンテニス観戦

毎年恒例のウィンブルドンテニス観戦。朝は四時半起床、ウィンブルドンに着くと長～い行列に並びます。テニス観戦、名物のいちご、選手にサインをもらう、選手と写真を撮ってもらう、楽しみ方はそれぞれです。

【1学期の行事】

4月 12 日	入学始業礼拝
4月 13 日	健康診断、オリエンテーション
4月 14 日	高等部実力テスト
4月 17 日	避難訓練
4月 19 日	クラブ活動・委員会紹介
4月 23 日	テニス部対外試合　Sussex Cup
4月 25 日	球技大会
4月 26 日	聖餐式
4月 30 日	Horsham District Council Offices 訪問 テニス部対外試合
5月 3 日	体力テスト
5月 4 日	ブルーベル見学
5月 8 日	Japanese Evening
5月 14 日、18 日	全校歯科検診
5月 15 日	ロンドン外出(P5～H2)
5月 16 日	バレーボール部対外試合　Epsom Cup
5月 19 日	ガーデンハウス避難訓練
5月 23 日～31 日	ハーフターム

6月 4 日	First Certificate in English
6月 6 日	実用英語技能検定一次試験 (準1級、1級)、IELTS Certificate in Advances English
6月 7 日	実用英語技能検定一次試験(2級以下) 第 71 回漢字書き取りコンクール
6月 9 日	剣道部対外試合
6月 10 日	Yuki Ito Cello Recital　外出
6月 12 日	卓球部試合 vs Elm Bridge
6月 13 日	Preliminary English Test Key English Test、ILETS
6月 14 日	生徒会主催ギルフォードショッピング
6月 16 日	テニス部対外試合
6月 23 日～27 日	期末考査
6月 28 日	聖餐式
6月 29 日	ウィンブルドン　テニス観戦
6月 30 日、7月 1 日	答案返却
7月 2 日	スクールコンサート
7月 4 日	終業礼拝、新女子寮聖別式、生徒帰宅
7月 4～11 日	夏期ホームステイ
7月 6～10 日	高等部 3 年夏期補習

ホーシャム市議会を見学

ホーシャム市議会を訪問して

高三—一　宇佐美　賢志

立教があるホーシャムの市議会に見学に行ってきた。

市議会の議長に招待されて訪問することになった今回の見学、テーマは「政治」について学ぼう、というものであった。

最初に議長のオコンネルさんからお話があり、その後、パワーポイントによるプレゼンテーション、そして最後に質問タイムという流れであった。

具体的には、市議会で、ホーシャムの中のローカルな自治がどのように機能し、どのような変化を実際の我々の生活の中にもたらしているか、というところに話の重点が置かれていた。

僕自身、政治などについてとても興味があったので、今回の市議会訪問は大変興味深いものであったし、最後の質問タイムにはいくつかの質問をすることもできた。

一番印象に残っているのは、なぜホーシャムは外からの外資系産業の増加と成長を狙っているのか、という自分の質問に対する議長の答えだ。

彼曰く、ホーシャムでは雇用創出のため、また空き地の有効活用のために外資系の大手企業がホーシャム内に来ることを強く望んでいるそうで、そのための誘致なども積極的に取り組んでいるとのことであった。

何が僕の心を動かしたか、それはやはり自分の目で、生で、規模が小さいとは言え政治というもの、そして経済、地域の様子を確かめることができたということである。

これから大人になっていくその途中段階にいる自分は、今回のこの市議会訪問を通じてこれからの未来のことをたくさん学ぶことができたと思う。

自分の将来を考える上で、大変良い機会となった。

An insight into the Horsham District Council

H3－1　Miyu Mimura

On Thursday morning of the 7th May, 26 Rikkyo students headed to the Horsham District Council as we had been invited to learn more about democracy.

All our hearts were full of anticipation of what was going to come as we had been doing a lot of preparation at school to be able to follow the presentation given there. In the preparations we mainly focused on the coming big event, the election of the committee and MPs as well as the general meaning of democracy. We even had a heated conversation about the international relationships and problems of Japan and England which we all enjoyed very much.

So it is not hard to believe how much our heartbeats rose when we first stepped into the council. It felt like stepping into a sacred place which had been closed to you until then. That feeling strengthened when we were warmly welcomed with coffee and tea as well as biscuits by Ms Sue Franks who gave us the feeling of being part of the council. But the most exciting moment which made our hearts dance was when we entered the council chamber. It was like a set of a movie inside the Parliament with a round table with big seats, microphones for each person and at the end of the room a big chair like a throne for the chairman.

After all of the students were seated we were welcomed by the Chairman of Horsham District Council, Brian O'Conell who politely gave us an insight of what exactly a council is. We were all surprised and honoured to hear that we, the Rikkyo School students, would be the last group to sit in the council chamber as the council was going to move to another building in the very near future. It gave us the feeling of becoming part of the history of Horsham Council. Then Ms Sarah Hogben who is in charge of communication gave us a power point presentation introducing the Horsham District and the way they govern it. We learned that Horsham had been selected to be the second happiest town in Great Britain due to a high employment percentage, many leisure activities and high health standards. They also explained that Horsham has an ageing population so they were focusing on making sure to provide enough leisure activities through building swimming pools which does not only work as a place of leisure but also helps to keep people fit and active. An interesting fact to hear was that the Horsham district lacks in the number of houses due to a high percentage of divorce which makes one residence into two doubling the number of houses needed.

The presentation was then followed by a question time where the chairman listened to our questions and tried to satisfy all of our curiosity. A lot of questions about the election were asked and we are grateful to the chairman for even answering to questions about personal matters. Unfortunately not all of the students were able to ask a question as we were running out of time and had to return to school. At last we gathered in front of the seat of the chairman and took a picture in remembrance of our trip.

To look back on our trip to the Horsham Council it cannot be denied that it was a good experience and gave us a little insight into the complex world of politics which always seems to be so hard to understand.

フィールドワーク

小学生合同社会

第１回
「Cranleigh 村の探索」

第２回
「英語をつかって、手紙を送ろう」

〈第一回内容〉
ワークシートに与えられた「昔のクランレー村」の写真をもとに、今の場所を探し出すミッション。翌週の授業では、地図をもとに写真を貼って、クランレーの今昔まとめをしました。

〈第二回内容〉
テーマは「英語をつかって、手紙を送ろう」です。まずは「行きの車の中で挨拶とお礼の英語の練習」をし、郵便局に着くと、それぞれはがきを一枚選び、英語を使ってはがきを買います。同時に、切手も買います。イギリスから手紙を送るための勉強です。切手を貼る場所、宛名・住所の書き方、必ず届ける国の名前をアルファベットで大きく書くことなどを勉強しました。最後に郵便局のポストに行って、自分たちで投函しました。

中学一・二年社会

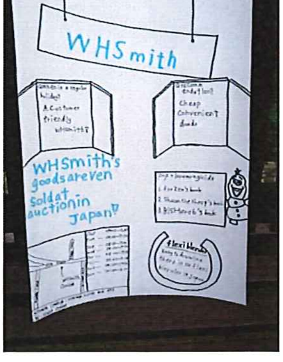
先日、中学一、二年生は社会科のフィールドワークでシャルフォード・ミル（Shalford Mill）に行ってきました。シャルフォード・ミルは学校近くのシャルフォード村にある一八世紀に出来た粉挽き所であり、かつては付近一帯の小麦を挽いていたほど栄えていた所です。粉挽きの機械のしくみを観察して当時の機械技術を学ぶ。そんなことを目的に私たちはミルへ向かいました。

学校に帰ってきてからはシャルフォード・ミルについてまとめた新聞の製作を行いました。今回は粉挽き所の機械のしくみを学ぶことが出来ただけでなく、当時の人々の働きぶりや暮らしぶりも学ぶことが出来て、充実したフィールドワークとなりました。

中学一年英語

英語の授業では毎週一回地元のクランレーの村に出かけてフィールドワークを行っています。初回はクランレーの商店街の地図を作成しましたが、もっと難しいタスクをやりたいという意見があり、グループごとにお店のポスターをつくることになりました。まずはお店を選び、お店でインタビューをするためにどんなことを聞きたいか、どうやって知っている英語で聞けるか、毎回準備をして何度もお店に足を運びました。ひとつの班はWHSmithというイギリスの有名な文房具店のポスターをつくったのですが、何度もお店にインタビューをしに行ったので、次第にお店に行くと笑顔で出迎えてくれるまでに。作ったポスターはお店の人もとても気に入ったと言って笑顔で受け取ってもらえました。

一方、もう一つの班ではケーキ屋のポスターをつくりました。お店でインタビューをするときに困らないように何度も練習した甲斐あって、堂々と英語で質問していたのが印象的です。ポスターもかわいらしいデザインのものができあがり、お店に持っていくと早速店頭で飾っていただけました。地域の方との交流を英語ですることができたという達成感を味わうことができたのが今回のフィールドワーク最大の収穫かもしれません。二学期も楽しいフィールドワークをお楽しみに！



《WHSmith のポスター》

《ケーキ屋さんのポスター》

立教生活特集2

立教の味

H1−1 森 英里奈

「うーん。なんか立教の味と違う。」

私は、この春に今までイギリスで食べたことがあっても日本ではあまり食べたことのない、いろいろな料理を作ってみたり、食べてみたりしていました。料理をあまりしない私がなぜこんなことをしていたのかというと理由があるのです。なぜかというと、ホームステイ先で食べたラザニアの味と立教で食べたラザニアの味が全然違っていたからです。今年の春休みに初めてホームステイをしました。それまでイギリスの料理イコール立教の食事でした。なのでホームステイ先の料理を食べたとき、少し驚きました。おいしかったのですが、いつもの味とこれほど違いがあるのかと驚きました。そこで私は、日本に帰った時にイギリスで食べたいろいろなものを作ったり食べたりしたのでした。

《毎週木曜日の昼に出される立教名物の「アップルクランブル」》

日本に帰って一番最初に作ったのは、アップルクランブルです。アップルクランブルといえばザ・立教食の、毎週木曜日のデザートとして出る、イギリスの伝統的なスイーツです。作ってみてわかったのですが、立教のようにきれいに表面を黄金色にすることができず、黄金色にするとリンゴが焦げてしまうという結果になりました。味もなんだか違う。でもおいしかったです。そのあともいろいろ作って食べてみました。キッシュ、ラザニアなどなど。しかし、全て立教の味とは違い、立教の方がおいしかったです。同じクラスの友達も「立教のラザニアは立教でしか食べられない味でおいしい！！」と言っていました。

いつものように過ごしていたらわからなかったことも発見することができました。これから3年間、食べて味を覚えて、日本で作れるぐらいになりたいです。キッチンスタッフの皆さん、いつも直接言うことができなくてごめんなさい。毎日おいしい食事をありがとうございます。

立教生活特集3

気球

M1 佐久間 悠生

６月２９日にウィンブルドンから帰って来た時、皿並べをしている時に「ぼー」という火の音がしました。外を見てみると、オーストラリアの国旗を掲げた気球が飛んでいました。その時、ぼくはとっさに友人とI-pod touchで写真を撮りました。

「サッカー場に落ちるんじゃない？」

と、話していました。ウィンブルドンで疲れていたけれど、関係なく何枚も写真を撮っていました。少しすると、先生方も写真を撮っていました。田中君と僕で気球と一緒に写真を撮ってもらいました。気球は日本でも見たことがないし、はじめてみたのですごく感動しました。

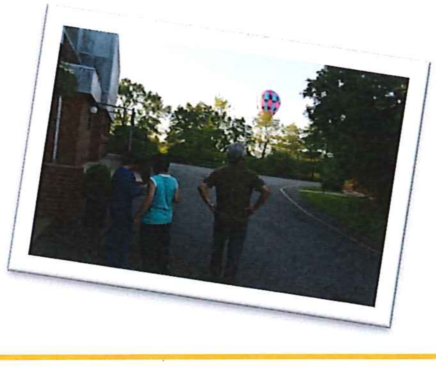
田中君と僕と二人で、

「ファイヤープリーズ。」

と、言うと火を出してくれました。

気球は、意外に速かったのでびっくりしました。シャッターチャンスは一度きりだったけど、良い写真が撮れたと思います。

ウィンブルドンも楽しく貴重な一日でした。



Garden House 新・女子寮完成

ついに、立教英国学院に新しい女子寮が完成しました。建設業者からの引渡しが五月一三日（水）に行われました。ハーフターム後より高校二・三年生女子四五名が、新女子寮に引越しをしました。充実した環境で生活を送り、より一層学習にも力が入ることでしょう。

謝辞

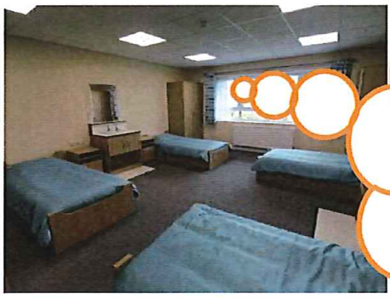
新女子寮の完成に際しまして、多方面からのご支援・ご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

立教英国学院　教職員一同

聖別式

新女子寮の「聖別式」が七月四日（土）終業礼拝後に行われました。当日は、Horsham の主教とRudgwick の司祭をお招きし、新女子寮完成を祝福しました。また、本校の生徒と教員によりAmazing Grace の音楽も奏でられました。

THE BLESSING OF NEW DOMITORY



新寮の自慢！
３階南側ドミトリーからの眺め

また、昼食時には、Garden House の写真入りケーキが公開され、生徒一人ひとりに配られました。

Sorry you are leaving...

15年間事務で務められたMrs.Jonesが離任されます。
今までありがとうございました。

第6回

チャプレンより

林チャプレンは立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業にはさまざまなお話をしてくださいます。

聴くこと　信じること

チャプレン　司祭　林　和広

今年は終戦七〇年目という節目の年を迎えましたが、終戦から数年後、英国でひとつの名作が誕生しました。それはC．S．ルイス(一八九八-一九六三)による「ナルニア国物語」です。第二次世界対戦中、オックスフォード大学モードリン・カレッジの特別研究員として活動していたルイスの家には数名の疎開児童たちが住んでいましたが、子供たちがあまり読書をしないのを見て、本を読む喜びを伝えたいという願いから「ナルニア国物語」の執筆を始めたと言われております。ルイスは聖職であった母方の祖父の影響もあり、クリスチャンとして少年期を過していましたが、宗教に疑問を抱き、無神論者となります。しかし、再び、信仰を取り戻し、キリスト教に関する著作を著し始めた後にこの作品が執筆されます。「ナルニア国物語」は七部に及ぶ大作ですが、これらの中の三部は映画化され、多くの子供達に愛されるファンタジー映画として人気を博しています。この作品には聖書的な思想が多く含まれており、聖書の授業の視覚的教材として用いています。ルイス研究家によれば、この作品にはルイス自身の人生における様々な悲しみ、痛みの体験の中でルイスを支えた目には見えない神様の眼差しというものが反映されていると言います。ルイスは神秘の国「ナルニア国」を描きながら、わたしたち人間が回復しなければならないもの、抱くべき心、生き方というものを示していると言います。

「ナルニア国物語」の第一部「ライオンと魔女」は第二次大戦中の英国で空襲に遭うペベンシー家の四人の兄弟—ピーター、スーザン、エドマンド、ルーシーが、疎開先の屋敷の空き部屋で大きな衣装だんすを発見するところから始まります。そして、その扉を開けた時、神秘の国「ナルニア」に招かれます。「ナルニア」はライオンの姿をした偉大な平和の王アスランが創造した世界でしたが、そこは白い魔女の支配によりクリスマスのない百年の冬に閉ざされていました。しかし、ナルニアで言葉を話す不思議な生き物たちからこの国の運命を変えるのは自分たちであると知らされます。四人の兄弟はそれぞれ異なる性格を持っていました。責任感が強く他人にも厳しい長男ピーター、慎重過ぎて臆病になりがちな長女スーザン、自信過剰で、狡猾な次男エドマンド、あどけない純真な末っ子のルーシー。ナルニアでの様々な出来事の中でそれらの性格がますます浮き彫りにされます。弱さ、未熟さを持った兄弟たちのありのままの姿がナルニアで露にされます。トラブルになればお互いに責任をなすりつけ合い喧嘩ばかり……。しかし、こうした経験を通して次第に彼らは自分たちの心の中を見つめ、自分の誤りに気づき始めます。そして、これまでに見たことのない世界を見て、視野が広げられて行きます。一人ひとりに変化が訪れつつある、そんな時に偉大な平和の王アスランとの出会いがあります。

アスランはシンプルでありながらもわたしたちにとって忘れてはならない言葉を語ります。兄弟を裏切る狡猾なエドモンドの振る舞いを断罪しようとする側近に「何か理由があるかもしれない。」と理由を聴くようにと促します。自分は何も出来ないと自分を信じることができない長男ピーターに「自分を信じる」ことの大切さを伝え、励まします。そして、アスラン自身が彼を信じて、支えることを伝えます。第三作では大きくなったルーシーが姉のスーザンの真似事ばかりをして自分を見失う姿を見て、「自分の価値を信じる」ことを伝えます。映画の中でのアスランの言葉に私は何度も心を打たれます。

自分の子供や他者との関わりを通して、しばしばしてしまうことは相手の思い、声を聴かずに一方的に怒ったり、裁いたりしてしまうことです。やってしまったことに対しては注意しなければならないのですが、「何か理由があるかもしれない」と聴く必要があるように思います。それによってその本人が抱えていることに少しでも触れることが出来るかもしれない、その人に変化が生まれるかもしれない、と思うようになりました。これは時間がかかることですし、苛立つこともあるかもしれないですが、「聴く」ことはやはり人間にとって大切なことなのだと思います。「聴く」ことは忍耐がいることですが、このことが「信じる」ということに繋がっていくのだと感じます。

今日の社会において難しいことは「信じる」ことです。利用価値、商品価値で人を査定する現代社会では人間関係のモラルも大きく変容しています。「何が出来るか」「役に立つかどうか」が重要となっていますが、何も出来ない、役に立たなくなれば捨てられる社会です。成績、成果ばかりが重視される社会。他人からの評価に恐れを抱きながら生きている人が溢れている社会です。

中学二年から親元を離れ、今日で言うアスリートコースに進学した私は文武両道を義務付けられていましたが、「結果が全て」の生活を送ってきました。寮生活から脱走したり、辞める人は後を絶ちませんでした。辞めずに残れたものの、テニスも勉強も中途半端に終わったように思っていた私は結果を出せなかった自分を責めました。しかし、幸いにも自分のこうした思いを聴き、アスランのような言葉をかけてくれる人々に助けられ、自分を信じることができるようになりました。その後、「神学」という学問をする喜びが与えられました。そこでは出来ない自分が責められることはなく、学問が持つ楽しさ、学ぶことの喜び、生きていることの素晴らしさを教えてくれるチューターたちとの出会いがありました。学問が苦手であった私の学習法や思考法がどのようなものかをゆっくりと見て、聴き、適切なアドバイスを与えてくれました。出来ないお前が悪いと頭ごなしに言われたことはありませんでした。「聴いてくれた」ことで私は救われたのです。これは勉強だけでなく人を育てること、人間関係を構築することに通ずることです。人は「聴く」ことで心が開かれます。他者に「聴く」ことで自分自身の視野が広げられます。お互いに「聴く」心を大切にすることでよりよい空間へと変容されていくのです。

4月に3名の先生が着任されました。写真左より、谷岡拓先生（国語）、田中裕紀先生（英語）、伊藤耕先生（社会）。
共に学び良き時間を過ごされますように。

立教英国学院通信の電子配信への切り替えにご協力下さい。ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。

infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk